

タイ王国におけるスポーツ国際開発研修プログラムに関する調査報告

蔭山雅洋*, 坂口俊哉**, 川西正志***

要約

近年、スポーツは、社会開発のための重要なツールとして、国際社会において認識されている。スポーツを通じた活動が広がるなか、教育、ジェンダー、貧困、健康、平和構築など社会課題の解決には、より高度な知識と能力を備えた人材が必要となる。そこで、今回の調査では、スポーツ国際開発に関する研修プログラムを作成するために、タイ王国（以下、タイ）での資料収集、およびプログラム構築に関する関係機関とのミーティングを実施し、これからのスポーツ国際開発に向けた課題を検討することとした。調査の結果、スポーツを通じた国際開発は、支援する側と支援される側という一方向的支援関係を対象国間に想定するのではなく、支援する側にとっても様々な学びの機会があるということ理解する必要性があげられた。今後は、タイ国内における研修プログラムの構築に向けた取り組みを加速させ、本学の強みを生かしたスポーツ国際開発が広がることを期待する。

はじめに

近年、スポーツは、社会開発のための重要なツールとして、国際社会において認識されている。スポーツを通じた活動が広がるなか、教育、ジェンダー、貧困、健康、平和構築など社会課題の解決には、より高度な知識と能力を備えた人材が必要となる。

日本の10倍以上とも言われる経済的格差のあるタイにおいて、スポーツを通じた支援活動をどのように展開していくのかは、これからのスポーツを通じた国際開発（International Development

through Sport: IDS）を考えるうえで重要な課題である。タイでは、2002年に、観光・スポーツ省が設置され、観光・スポーツ大臣が省の長となり、国家の観光とスポーツに対して広範な責任の下、観光産業とスポーツの振興を行っている。タイのスポーツは、伝統スポーツではムエタイやセパタクロー、近代スポーツではサッカーとバレーボールが代表種目としてあげられる。その中でも、サッカーでは、プロリーグに力を入れており、日本人選手が活躍している。このような急速な発展が見られるタイにおいて、スポーツのクラブ運営や施設などの情報を収集することは、今後派遣される学生がタイ国内でどのようなことができるのか、何をしたいのか、そしてそのためにはどのような能力が必要なのか見えるのではないかと考えた。

そこで、今回の調査では、スポーツを通じた国際開発に関する研修プログラムを作成するために、タイでの資料収集、およびプログラム構築に関する関係機関とのミーティングを実施し、これからのスポーツ国際開発に向けた課題を検討することとした。

調査日程

今回の調査は、2015年3月14日から3月23日の期間に実施した（図1）。

タイ・バンコクのスポーツ事情

タイでは、2002年に、観光・スポーツ省が設置され、観光・スポーツ大臣が省の長となり、国家の観光とスポーツに対して広範な責任の下、観光産業とスポーツの振興を行っている。タイのス

* 鹿屋体育大学 特任助教

** 鹿屋体育大学 スポーツ人文・応用社会科学系 講師

*** 鹿屋体育大学 スポーツ人文・応用社会科学系 教授

3月14日	(土)	14時～19時：移動, 鹿児島-羽田, 東京泊
3月15日	(日)	8時～19時：移動, 東京-バンコク, バンコク到着後 ホテルへ
3月16日	(月)	9時～14時：牛尾氏とのミーティング<タイ視察の予定やタイのスポーツ事情について> 14時～15時：昼食, ショッピングモールにて 15時～18時：ショッピングモールで見たタイの食事情とスポーツ店の価格の現状調査
3月17日	(火)	9時～10時：移動 10時半～12時：Ouaypon Tungthongchai, Surachai Jewcharoensakul, Nattaya Keowmookdar, ACHARA SOACHALERM, SOMKID PRABPAI 先生とのミーティング <共同専攻におけるインターシップ先 (On the Job Practice) の受け入れ, 貯筋の活動について> 12時～13時：昼食, カセサート大学の先生との食事 13時～14時半：大学の施設見学<トレーニングジムなど> 15時～17時：タイ古式マッサージの体験 17時半～21時：夕食, カセサート大学の先生との食事 21時～22時：ホテルへ移動
3月18日	(水)	8時～9時：移動 10時～11時：Niramit Kunanuwat 先生とのミーティング <共同専攻におけるインターシップ先 (On the Job Practice) の受け入れ, 貯筋の活動について> 11時～12時：大学の施設見学 (調理室, 図書館, パソコン室) 見学 12時～13時：昼食, スワンドウシット・ラチャバット大学の先生との食事 13時～14時：大学内の施設見学 (ホテル, プール, トレーニングジム, 保健室, マッサージ店) 見学 14時～15時：Justin bearing precious 先生とのミーティング <共同専攻におけるインターシップ先 (On the Job Practice) の受け入れ, スワンドウシット・ラチャバット大学とスポーツ公社との連携事業について> 15時～16時半：ホテルへ移動 16時半～17時半：坂口先生, 牛尾氏, 木村氏とのミーティング<今後のタイとの関わりについて>
3月19日	(木)	8時～9時：移動 9時～10時半：タイの観光地視察, ワット・ポー 10時半～13時：タイの観光地視察, ワット・プラケオ&王宮 13時～14時：移動 14時～17時半：ショッピングモールで見たタイの食事情とスポーツ店の価格の現状調査 17時半～19時半：ホテルへ移動
3月20日	(金)	8時半～9時半：移動 9時半～11時半：スポーツ施設の見学<新国立競技場, 国立スポーツ科学センター, ライフル射撃場, アーチェリー場, 自転車競技場> 11時半～12時：ショッピングモールへ移動 12時～13時：昼食, ショッピングモールにて 13時～14時：ショッピングモールで見たタイの食事情とスポーツ店の価格の現状調査 14時～15時：スポーツ施設の見学<旧国立競技場とその周辺> 15時～16時：ショッピングモールで見たタイの食事情とスポーツ店の価格の現状調査 16時～17時半：ショッピングモール内のトレーニング施設の見学 17時半～20時半：ホテルへ移動
3月21日	(土)	8時半～9時：移動 9時～11時半：スポーツ施設の見学 (サッカーのクラブチーム) 11時半～12時半：昼食 12時半～13時半：移動 13時半～14時半：スポーツ施設の見学 (ムエタイのジム) 14時半～ 18時～19時：公園とその周辺のスポーツ事情 19時～：ホテル到着
3月22日	(日)	
3月23日	(月)	22日12時～23日13時：移動, バンコク-羽田, 羽田-鹿児島

図1. 調査日程

ポーツは, 伝統スポーツではムエタイやセパタクロー, 近代スポーツではサッカーとバレーボールがあげられる。街中ではサッカーの他にセパタクローをしている人々の姿が見られ, 公園ではトレーニング器具を使用して運動している人もいれば, エアロビクスを楽しむ人など, 思い思いに身

体を動かしている人々の光景があった(図2)。

またタイでは, 観光・スポーツ省が設置されているように, 観光産業とスポーツの振興を行っている, スポーツと観光とが密接な関わりを持つ国であると考えられる。つまり, タイのスポーツ事情を知るうえで, 観光資源は切っても切れない



図2. 公園でのエアロビクスを行う人々

関係にあることが伺える。我が日本においても、観光庁が「観光立国戦略」の一環として着目し、2012年4月には産学官の連携組織の日本スポーツツーリズム推進機構が設立されている。今後は、スポーツツーリズムとしてのタイの戦略などを調査し、日本との差異や類似性を検討することで、IDSに関する新たな視点を見出せるであろう。

スポーツ施設とクラブ

1) 国立競技場，スポーツセンターなど

今回の調査では、新旧の国立競技場，スポーツセンター，ライフル射撃場，アーチェリー場，自転車競技場などの施設を見学した（図3）。新しい国立競技場は、1998年バンコクアジア大会のために設立されたものであり、その競技場の敷地内にはさまざまな競技団体の事務所や王室とスポーツ（ベタンク，ヨット，カーレース）との関わりにまつわる展示コーナーがあり、見学することができた。またヨット競技では、王室からアジア大会に出場するなど、タイはスポーツに対して国全体を通して熱心であると感じた。

今回、スポーツ施設のスタッフとお話をする機会がもてず、施設の利用方法や利用人数，活用方法などを調査することができなかった。しかし、アーチェリー場では国際大会を見ることができ、世界規模で開催できるような施設であるというこ



図3. 新国立競技場とその周辺の施設



図4. サッカーのクラブチームのコーチと選手たち

とを感じた。今後は、タイのスポーツ施設の実態を把握するため、施設を利用する人や働く人に対してインタビューをすることが不可欠であろう。そして、タイのスポーツ団体をまとめる組織であるスポーツ公社（日本では日本体育協会にあたる）とのミーティングを実現させることで、我々が考えるタイでのIDSが見えるのではないかと考える。

2) サッカーのクラブチーム

今回、見学したクラブは、創設して10年を超える組織であり、イングランドの名門チームのスポンサーが運営資金のすべてを出資するチームであった（図4）。このクラブチームのコンセプトは、1) サッカーが上手になる・好きになる、2) サッカーを通じて健康になる、3) 規律、社会に貢献する人材になることである。このクラブは対象年齢が5歳から18歳であり、約600人の選手が在籍する大きな組織であった。練習は、年齢や熟達度合に応じて分かれ、週4回（火、水、土、日）行われていた。土曜日と日曜日には、朝6時から8時まで全体練習（基礎的な練習）が行われた後に、8時から10時半まで特別スクール（ゲーム形式の練習）が開講されていた。そして、希望者には、その後英会話などのレッスンが行われていた。このクラブのコーチは、タイのサッカー協会が認定するライセンスを持ち、すべてのコーチがボランティア（仕事は様々で、仕事の傍ら、サッ

カーを指導している）で行っていた。コーチ以外に、グラウンドや道具を管理するスタッフが4名いる他、タイの一部リーグに所属するチームのトレーナー（理学療法士）1名が土日限定で帯同し、選手がサッカーに集中しやすい環境づくりがなされていた。コーチの中には、創設当初の選手や現在タイのプロリーグで活躍しているクラブ出身の選手がおり、クラブのOB・OGが後輩を教える、クラブに根付いた運営を視察することができた。クラブなどの組織の運営には、様々な人の力が重要になるが、このクラブはお金では量ることのできない財産があるように感じた。

タイでは貧富の差が大きく、サッカーを習うための費用が払えない家庭もあるとのことで、このチームでは収入や家柄は関係なく、誰もがサッカーを自由にできる環境を与える組織作りを行っていた。練習後には、スポンサーから出資された牛乳やパンなどを飲食する風景もあった（図5）。ヘッドコーチやスポンサーは、我々との会話の中で、「タイは貧富の差が大きく、サッカーを習うための費用が払えない家庭もある。そのため、このクラブでは収入や家柄は関係なく、サッカーを通じて友達となり、将来的には平等で平和な国を作ってほしい」と語った。このようなことは、スポーツを通じた教育であり、豊かな街づくりに必要なことだと感じた。

本学のサッカー部は、全国大会ベスト4の実績があり、コーチングを学ぶ学生も少なくはない。



図5. 練習後の風景



図6. カセサート大学の先生とのミーティング

このクラブチームでは、スポンサーのつながりによって、プレミアリーグのコーチがこのクラブのコーチに対し指導する環境もあるため、本学の学生が海外で指導者として幅広い年齢の選手を指導することは、将来、幅広い知識と経験を身に着けるための有益なプログラムになると感じた。今後は、日本とタイのサッカー協会の組織運営や育成システムの違いなどを調査することで、今後我々が介入すべきIDSが見えるのではないかと考える。

IDS プログラムにおける大学連携

1) カセサート大学

カセサート大学は、1943年に創立した、タイ王国有数の国立総合大学である。またタイで最初の農業大学であり、3番目に古い大学でもある。15以上の学部（農学部、理学部、社会科学、人文科

学、教育学、工学、建築学など）、大学院、研究所を擁し、タイ国内に7つのキャンパスがあり、約6万人以上の学生が在籍する。また同大学と協定を結ぶ日本の大学は、本学の他に筑波大学など数校があげられる。このように、同大学は、日本の学生を受け入れた経験を持つ大学と言える。

今回、教育学部で体育学科の教員である先生とミーティングを実施し、その後大学内の施設を見学した。本調査の目的である「共同専攻における教材開発研究の資料収集」については、Ouaypon Tungthongchai (Head of Department of physical education, Ph.D.) 先生, Surachai Jewcharoensakul (Associate Professor, Ph.D.) 先生, Nattaya Keowmookdar (Assistant Professor, Ph.D.) 先生, ACHARA SOACHALERM (Ph.D.) 先生, SOMKID PRABPAI (Ph.D.) 先生にスポーツ国際開発共同専攻について説明を行い、インターンシッ



図7. スワンドウシット・ラチャパット大学の先生とのミーティング

ブ先 (On the Job Practice) の受け入れが可能かどうかの是非を話した (図6)。

Quaypon Tungthongchai 先生のお話の中では、水泳の授業の重要性や競技力の強化の話題がでた。嘉正 (2013)¹⁾によると、カンボジアは水泳の教育や競技が国内でまだ浸透していない事、水浴びではなく、人々が泳ぐためのプールのような環境が少ないことが報告されている。今回のミーティングの中でも、水泳を指導できる学生をタイへ派遣してほしいと要請の話が出たため、本学のカリキュラムにある海洋スポーツや水泳といった科目は、タイでIDSを遂行する上での強みになる可能性を見出せた。

また今回の訪問では、本学が主催した第1回国際スポーツアカデミーシンポジウムに参加した2名の学生と会うことができた。アジア諸国の大学院生レベルの学生および各国のNOCからの推薦が得られるトップコーチや指導者を対象とした2週間の国際セミナーでは、さまざまなテーマでの講義や国際交流の場があり、充実した時間を過ごすことができたと我々に語ってくれた。2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催に向けた教育プログラムは、本学の強みであろう。

2) スワンドウシット・ラチャパット大学

スワンドウシット・ラチャパット大学は、教育、科学とテクノロジー、経営科学、人文・社会科学、看護、調理科などを擁する大学である。同

大学では、大学内にホテルやマッサージ店、洋菓子店が経営されており、学生の就職口や実習先となっていることが特徴的である。今回の調査では、Niramit Kunanuwat 先生 (Vice-President for international Affairs, Assistant Professor, Ph.D.) と Justin bearing precious 先生 (Faculty of Education, Ph.D) とスポーツ国際開発共同専攻についてミーティングを行い、インターンシップ先の受け入れが可能かどうかの是非を話した (図7)。

また同大学では、調理科が設置され、食育に関する指導に力を入れている。そのため、タイの食事や文化を理解するためには、同大学は重要な役割を担っていると言えよう。本学では、長島講師の監修の下、「鹿屋アスリート食堂」が話題となっている。このように、両国において、スポーツと食事が注目されている最中、調理科が設置されている大学へのインターンシップは、日本とは異なる文化の中で「スポーツと食」の関わり方を学ぶことにつながり、新たな視点を見いだせることにつながるであろう。

本学では貯筋運動を通して、高齢者の健康・体力づくりを推進してきた。貯筋運動プロジェクトとは、毎日行いながら貯筋していく道具のいらない筋力トレーニングを、健康運動指導士、健康運動実践指導者によって総合型地域スポーツクラブで広げ、これからの超高齢社会において、できるだけ多くの方々のQOL (生活の質) を高く長く保つことを目指すプロジェクトである。現在、世界

では日本, 台湾, 韓国と東アジアを中心に浸透しているプロジェクトであるが, アジア諸国をみても, 生活スタイル(食生活など), 文化, 生活水準で効果が異なる。そのため, 健康増進を目的としたスポーツ・運動を推進するためにも各国の生活習慣や文化を踏まえることが重要であり, 「食事管理」に関する研究の know-how を持つスワンドゥシット・ラチャパット大学へのインターンシップは, 国際交流・貢献を推進する人材育成を担う充実した活動になると言えよう。

タイ国内では, サッカーのプロリーグに力を入れており, 日本人選手が活躍している。近年の我が国のサッカー界は, ワールドカップに出場するなど常連国となっている。Justin bearing precious 先生は, この背景の裏側にはJリーグのマネジメントがあると考えており, タイが日本に近づくためには, Jリーグのマネジメントを理解する必要性を述べていた。そのため, 将来的には, オリンピックサポートやJリーグのマネジメントといった日本のスポーツ科学やスポーツ産業について興味があり, 同大学から日本へ留学生を出したいとの事であった。

本学では, 2015年3月にスポーツパフォーマンス研究棟が設置され, 日に日にその施設を使用したオリンピック・パラリンピックのサポートや研究促進への関心が高まっている。そのため, スポーツ科学を学ぶタイの学生にとって, 世界で類を見ない研究施設で学ぶことは, 日本のスポーツ・体育・健康の専門的な知識や技術を理解する良い機会になるといえよう。今後は他国から日本へ来て, 日本のスポーツ支援や文化を学ぶ人が, 東京オリンピック・パラリンピックが近づくに伴って増加していくであろう。

3) タイの大学とのミーティングから見えた IDS の強みと課題

両大学の先生とのミーティングでは, スポーツ国際開発共同専攻について説明を行い, インターンシップ先の受け入れが可能かどうかの是非を話

した。両大学ともに, 本学と筑波大学, 日本スポーツ振興センターと協働する本プログラムの目的(社会開発のためのスポーツの活用について多様な視点から学ぶこと)に対し興味を抱き, インターンシップ受け入れに対し好意的であった。また2020年に東京五輪が開催されるため, 各競技団体がオリンピック・パラリンピックへ向けてどのような科学サポートを行っているのか, どのようなマネジメントを行っているのかといった日本のオリンピック・パラリンピックに向けた活動に興味を抱いており, 日本の大学でスポーツ・体育・健康の専門的な知識や技術を学ぶ学生を受け入れたいとのことであった。今後は, 本学の強みであるスポーツ科学を通して, 諸外国の大学と連携を図ることも, IDSには重要なことであろう。

まとめ

スポーツを通じた国際開発は, 支援する側と支援される側という一方向的支援関係を対象国間に想定するのではなく, 支援する側にとっても様々な学びの機会があるということを理解することが必要であろう。その中で, 近年中進国でありながら少子高齢化あるいは小児の肥満増加が問題になったタイでは, 健康に対する意識が高いため, 本学の強みである運動指導あるいは栄養の調査を実施することで, 中進国における健康や体力増進につながるであろう。そして, サッカーや水泳, 海洋スポーツといったスポーツ指導者の養成は, タイ国内の重要な課題であるため, 本学の学生が介入すべきIDSが見えるのではないかと思われる。さらに, 本学の強みであるスポーツ科学を生かすことで, タイの国際競技力向上のために貢献できるであろう。

日本の10倍以上とも言われる経済的格差のあるタイにおいて, スポーツを通じた支援活動をどのように展開していくのかは, これからのIDSを考えるうえで重要な課題となるだろう。今後派遣される学生自身が, それぞれの視点で考える必要のあるテーマではあるが, 派遣先で何をしたいの

か、そのためにはどのような能力が必要なのか、さまざまな視点を通したIDSに気づくことのできる貴重な機会がタイ視察には溢れていたと今回の調査を通じて感じた。今後、タイ国内における研修プログラムの構築に向けた取り組みを加速させ、本学の強みを生かしたIDSが広がることを期待する。

参考資料

- 1) 嘉正 空知「編」(2013)カンボジア王国スタディツアー報告, 2013年度「筑波大学, 鹿屋体育大学 共同事業グローバル人材の育成研修」, 15-24.

謝辞

今回の調査を進めるにあたり、牛尾衛氏にご協力をいただきました。ここに記して感謝の意を申し上げます。

付記

今回の調査は、平成26年度国立大学改革強化推進補助金（筑波大学との連携共同専攻設置）ならびに特別経費（グローバルスポーツリーダー育成事業）によって行われたものである。